始

~~424-23~~
421-18

木版浮世繪傑作畫集

第一集

大正
14.8.7
内交

婦人手業操鏡の内

洗濯の圖

喜多川歌麿筆

歌麿は石山石燕の門人にして初め豊章と名乗て居た最初は美人ばかりでなく役者花鳥の類までも描いて居たが後には美人の風俗の繪を描くを主とした歌麿の美人は清長とは多少行方を異にし特に作家の見た實在の美人を一端歌麿自身の書想内に取入れ熔治を試み其れを筆に上すのであつた故に形としては多少不自然に思はれるものもあるが繪畫の氣分から云へば觀者を魅了する力を以て居る

本圖は歌麿中年期即ち天明頃の作にして同題の基に婦人の起居動作の圖數枚を畫いて居るが何れも傑作として知られて居る

[illegible]

[illegible]

當世遊里美人合之圖

鳥居清長筆

鳥居清長は鳥居の三代清満の門人であるが師と違つて流麗なる風で遊里其他の女の風俗を描き美人畫に妙を得て居た本圖は遊女が遠目鏡を見つゝある圖を描いたものであるが女の形を描寫するに無理かなく色彩も穏和に出來て快い感じを與へて居る清長中年の作にして最も傑作として珍重せらる

清長は相洲浦和の人風に江戸に出て日本橋材木町に住み家主となり又白子屋市兵衛とて書居を營んで居た後今の日本橋川瀬町其の頃新場と呼んだ魚市場のあつた邊に住み世間から新場の清長と云はれて居た晩年本所番場町に轉居し製作にもあまり沒頭せず閑かに餘世を送つて居たが文化十二年五月二十一日享年六十四歳で歿した白子屋の菩提所である両國回向院に葬り法號を長林英樹信士と云ふ

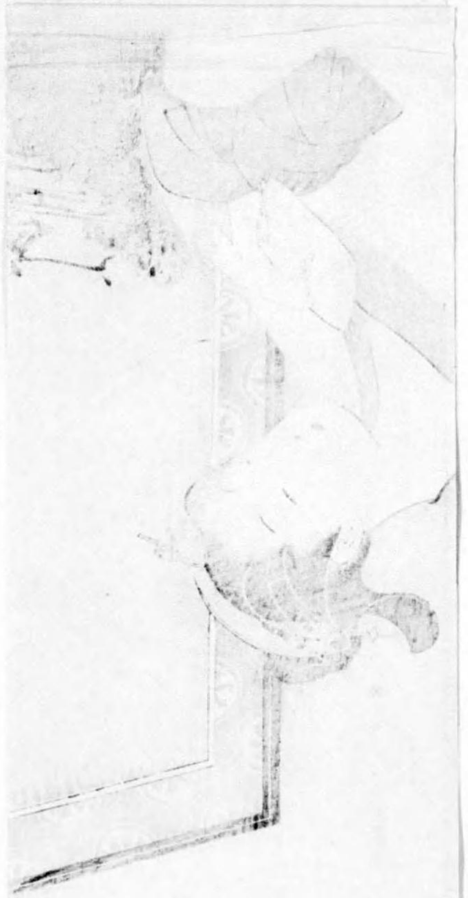
遊女大顔の圖

喜多川歌麿筆

歌麿の作品中最も傑作と稱せらるゝものは所謂大顔で半身の美人である本圖は即ち其の一にして遊女の半身を描いたものである女の顔の表情を巧みに描出する技倆は此の大顔に依つて發揮されて居る
歌麿の全盛期は版畫肉筆共に寛政頃にしてそれより幕府の禁遏により委靡振はず文化三年九月二十日病歿した

[illegible] [illegible]

[illegible] [illegible]



長繪夜着姿美人の圖

鈴木春信筆

鈴木春信は通稱を治兵衛　長榮軒と號す　江戸の人にして兩國米澤町に住居せり　西村重長の門人なるが寶暦時代の作品紅繪には鳥居清滿石川豊信の影響を受くる事少なからず　春信が麗美なる版畫の作品に從ひしは明和二年より同四年頃にして即ち錦繪の初期に該る彼れの意匠は頗ぶる奇拔なるものあり皚々たる雪景色に一美人を点出し又は夜色雨中などを美人の背景に用ひたるが如き其例にして殊に柱繪に構圖の特に優れる兎品あり　本圖は即ち其の一にして淡鼠色の背景に白衣の美人を描き配色の調和を得せしめ然も是れを無色摺キメコミを加へ一層画趣を湧出せしめたり春信は明和七年六月十五日享年四十六才を以て歿す

長繪夜着姿美人の圖

鈴木春信筆

鈴木春信は通稱を治兵衛　長榮軒と號す　江戸の
て向國米澤町に住居せり　西村重長の門人なるな
代の作品紅繪には鳥居清滿石川豊信の影響を受
ならず　春信が麗美なる版畫の作品に從ひし
年より同四年頃にして即ち錦繪の初期に該る彼
は頗る奇抜なるものあり殊々たる雪景色に一
出し又は夜色雨中などを美人の背景に用ひたる
例にして殊に枠繪に構圖の特に優れる逸品あり
即ち其の一にして淡鼠色の背景に白衣の美人を
の調和を得せしめ然も是れを無色摺キメコミを
画廊を湧出せしめたり春信は明和七年六月十五
十六才を以て歿す

近江八景三井晩鐘

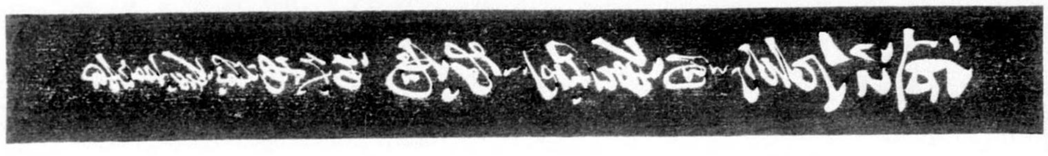
初代　安藤廣重筆

安藤廣重は幼名德太郎　後重右衛門又は德兵衛と稱す
江戸八重洲河岸火消同心安藤源右衛門の養子なり（實父
は津輕藩の小姓頭田中德右衛門）文化八年十五才の時歌
川豐廣の門に入り浮世繪を學ぶ　文化九年歌川廣重の名
を與へられ一幽齋又は一遊齋と號し文化十二年一遊齋を
改め一立齋と稱し天保四年頃より一立齋又は單に立齋と
稱せり
廣重は風景画の外に美人花鳥等をも書きしが彼れが今日
世界的に其の名を知られたる所以は所謂風景畫に存す殊
に東海道五十三次に於て然りとす
本圖も又彼れ晩年の傑作にして遠近法により自然の事象
を取り自然美を體とし彼獨特の妙技を振へる逸品なりと
す
廣重は安政五年九月六日享年六十二才を以て歿し淺草北
松山町願宗寺に葬る法號を順功院德翁立齋居士と稱す

あやめ三美人の圖

鳥高齋榮昌筆

榮昌は榮之の門人にして鳥高齋と號す　榮昌は師匠榮之の未だ遜癖に陷らざる優秀なる畫風を巧に體得し其技巧に於て歌麿の感化を受け而も典型に陷るの弊なく溫雅なる趣に富み其傑作に至りては師を凌駕し歌麿の壘を摩せんとするの感あり　本圖の如き瀟洒たる衣服を鄉へる三人が楚々として架橋を逍遙せる樣柔は當時の風俗を最もよく描きたる逸品なりとす



近江八景の内

唐崎の夜雨の圖

初代　安藤廣重筆

廣重の傑作には月　雪　雨或は霧などを描けるものに多し是れ彼れが斯る景象に深き興味を有し精細に之を觀察せしに因る

本圖は彼れの傑作品たる近江八景の内にても特筆すべき優作にして濃藍色の水面に古松の配枝加ふるに降雨の描線各相調和し水邊の夜雨の景象を慣感なく發揮し觀者をして自然に畫中に吸入するの力を有す

本近江八景は第二輯(既刊)より第九輯を以完結す

(以下説明省略)

五代目 市川團十郎の圖

東洲齊寫樂筆

寫樂は通稱齊藤十郎兵衛　江戸八丁堀に住み脊て阿洲候の能役者たり　東洲齋と號し俳優の似顔を畫く。　殊に五代目團十郎。白猿。幸四郎。半四郎。菊之亟。仲藏等をよく描けり　寫樂が是れを描くに當り自已の觀想を寫實の上に加へ其の個性を誇大視し從來の如く修飾的描寫法を避け其特異の点を描きて微に入り要を捉へ唇邊の一黑子さ雖も忽にせず些少の欠点をも誇張して畫面に載せ其の人の特徴を最もよく表現するを得たり

彼れが撰びし表現の方法は描線を薄墨摺とし露出せる肉体には胡粉を施し頭髮眼眸　口唇　襟其他の要所に濃墨をかけ又色調に注意し不透明色を用ひ畫面を浮出せるか如き感を與へんが爲め多くは背色を暗銀色雲母摺と爲せり雲母摺は必ずしも寫樂の創意にあらされとも巧みに配色の効を收めたるは彼れを最とす

本圖は彼れが最盛期に描けるものにして五代目市川團十郎の雅台姿なり本圖の顔面の表情は手の位置及其の働と相應して最も好適し生氣紙面に躍如として一髮を容るるの間隙なく他に類例なき逸品なりとす

寫樂の作畫は天明の末頃に始り寛政の半頃を以て筆技を磨したり

市川團十郎

東洲斎寫楽

實競色乃美名家見
墨堤
春の夕
尾花
光三郎
哥川楽吉筆

近江八景
瀬田夕照

遊江景南湖田子唐稿

初代西森慶重筆

今樣藝者風俗

機田湖龍斎筆

今様藝者風俗
湖龍齋画

松雪風月市川之圖

観雪亭月麿筆

松葉屋内市川の圖

月麿筆

月麿は歌麿の門人にして菊麿又は喜久麿と稱し文化元年月麿と改む通稱六三郎觀雪齋と號す

月麿は師歌麿の畫風を巧みに体得し遊女の半身をよく描き其の技倆に於て師に劣らず殊に丸海老屋内幸榮松葉屋内市川の圖の如き彼れの作品中の優作なりと云ふべし

本圖は即ち其の一にして彼れの技能最も圓熟せる文化年間の作品なり微細なる描線は精緻なる彫技と相和し彼れの技巧を盡したる逸品なりとす

矢橋帰帆

遥望天橋歸帆

初代安藤廣重筆

本版

滄社繪葉作畫集

第二集

大正
14.8.7
内交

本版

滄社繪葉作畫集

第三集

大正
14.8.17
内交

本版

源花繪葉書集

第四集

大正
14. 10. 24
内交

425
18

大正
14. 10. 24
交換

頒布規定

一、木版浮世繪傑作畫集は數ある浮世繪師中より世界に其の名を知られたる有名な浮世繪師の傑作品のみを撰び毎月一回左の内容により繼續發行會員に頒つものです

一、木版浮世繪傑作畫集は一集(三枚一組)壹圓七拾錢繼續會員に限り壹圓五拾錢

一、朝鮮臺灣其他海外は一集二圓繼續會員に限り壹圓八拾錢

大正拾四年三月二十日印刷
大正拾四年四月一日發行
以降毎月一回繼續發行

編輯兼發行人　大阪市北區櫻宮中野町三丁目八番地　山下關一

印刷人　尾野善吉

印刷所　大阪市北區櫻宮中野町三丁目八番地　大阪用達合資會社美術部

發行所　國際美術社版畫部
振替口座大阪五九七六七番
電話(ヒ又はヤマ)

終